

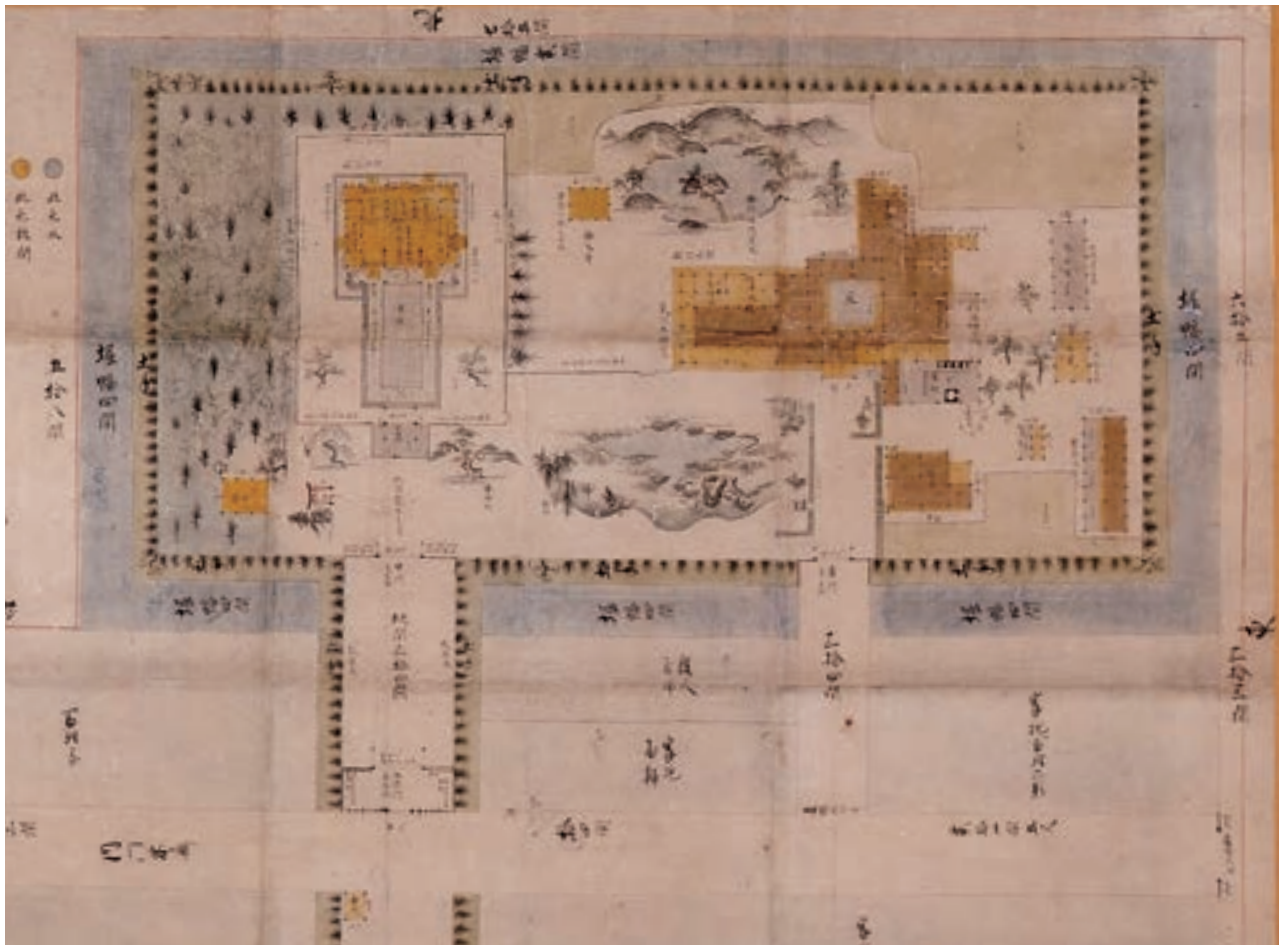
第3章 史跡等の本質的価値

3-1 史跡の本質的価値

足利学校の本質的価値については、史跡指定時の文章にあるように、まずその歴史があげられる。わが国古代以来の学問所の伝統を受け継ぎ、足利氏や上杉氏、小田原北条氏などの庇護を受け、戦国時代に最盛期を迎えた。キリスト教宣教師は、日本で最も大きく有名な学校として西洋に喧伝した。戦乱で都の大学が衰退する一方、唯一の開かれた学校として全国から学徒が集まり、儒学等の学問を教授していた。江戸時代には幕府の庇護のもと、学問の府、貴重な書籍をもつ文庫として知られた。明治時代に学校としての歴史は閉じられたが、大成殿や学校門等の建物及び貴重な書籍が保護され、大正10(1921)年には敷地全体が史跡指定されたのである。

史跡指定時の官報告示は、地番だけが記され、指定理由や本質的価値に関する記述はない。そこで、大正15(1926)年10月、柴田常恵編『史蹟調査報告第三 栃木懸下に於ける指定史蹟』で紹介された記述に基づいて、本史跡の本質的な価値を確認する。

まず、四辺形の南辺に細長い参道を加えた史跡の形状、面積や地籍、東半分は小学校敷地であることが記される。次いで寛文(後に寛政と判明)年間の絵図と現況を比較し、建造物が記載される。現存する入徳門、学校門(中門)、杏壇門、瓦葺堀の内側に建つ聖廟はもちろん、絵図だけに記される西側区域の文庫、鎮守の社殿(稲荷社)、東側区域に裏門、書院、祈禱殿(方丈)、書院、寮舎(衆寮)、東側の倉庫(木小屋か)である。これらの建造物を濠(堀)と土塁が包括し、明治維新頃までは絵図の姿であった。



江戸時代中期の足利学校(「境内惣坪数並諸建立物絵図」寛政3(1791)年)

続いて明治維新以降、足利藩、栃木県、足利市と変遷した管理状況、西半分の区域の濠を埋め立て土塁を移築したこと、南濠を埋め立て稲荷神社を遷座したことを記す。また、各門や大成殿等建造物の構造や形式、字降松の由来、孔子像等の説明が記される。さらに歴代庠主並びに学校役人(代官)茂木氏累代墓の詳細、足利学校の創建に関する諸説を紹介し、歴史が記される。最後に以下のようにその価値がまとめられている。

「足利学校の由来明瞭ならずとも、其存立の最も明白なる上杉憲実以後としても長き時代に亘って継続するもので、直接或は間接に我文教を裨補せし所少しとせぬ。しかも其舊規の見るべきものあって、主要なる聖堂等の建造物を存し、また当時の珍籍を今に伝えて居るは、教育学芸に関する史蹟として重要なものに属するよりなれば、之が江戸時代の地域を一括して指定を見るに至ったのである。」

この報告から史跡足利学校跡の本質的価値を確認すると、長きにわたって継続し、わが国文教を補うこと大きく、旧規に参考となるところ多く、主要な聖堂等の建造物が遺り、当時の珍しい書籍を今に伝える場であり、教育や学問、芸術に関する史跡として重要なものなので、絵図に示された区域を一括して指定したとされるのである。

史跡の構成資産として重要なものは、江戸時代の絵図に描かれ、平成2(1990)年に復原した建造物等の伽藍配置がある。具体的には四辺形の史跡地と細長い参道、周囲を圍繞する堀と土塁、内部の建造物や庭園等である。史跡付として「聖廟等付属建物を含む」とされ、現存する孔子廟(大成殿とその周囲の築地塀)、入徳門、学校門(中門)、杏壇門はもちろん、庠主等の墓地やその配置も構成資産と考えられる。

史跡足利学校の建物等の伽藍配置は、孔子廟が建つ西側の孔子廟区域と、学徒が学習した東側の学問所区域とに大きく二分できる。孔子廟区域は、寛文8(1668)年建立の大成殿をはじめとする江戸時代以来の諸建物が遺る。学問所区域は江戸時代中期の姿に復原した建物が建ち、地下遺構は保護されている。このように孔子廟区域と学問所区域が並列する伽藍配置は、東アジア全体に広がる学校の伽藍配置に起源が求められる。中国北京にある国子監は、孔子廟区域が東側、学問所である国子監が西側にあり、足利学校とは逆の配置になっている。また、韓国ソウルにある成均館では、孔子廟区域が南、学問所である明倫堂が北と前後に、ベトナムハノイにある文廟でも同じように孔子廟区域が南、学問所区域が北に配置されている。

このように、足利学校の伽藍配置は、これら東アジアの学校の系譜を受け継ぎ、孔子廟区域と学問所区域が並置される構造である。一方、学問所区域に建つ建物は、禅宗寺院の本堂形式をとっており、他とは全く違う特徴をもつ。これは、中世日本における儒学が、禅宗寺院の僧侶たちによって教え、学ばれていたという日本独自の慣習に原因がある。足利学校の伽藍配置の特徴は、東アジアの学校に共通する孔子廟区域と学問所区域が並列する形を継承し、一方で、運営主体が禅宗寺院であったことから、学問所区域は、禅宗寺院の本堂形式をとるといふわが国独自の特徴をもつことが特筆されるのである。



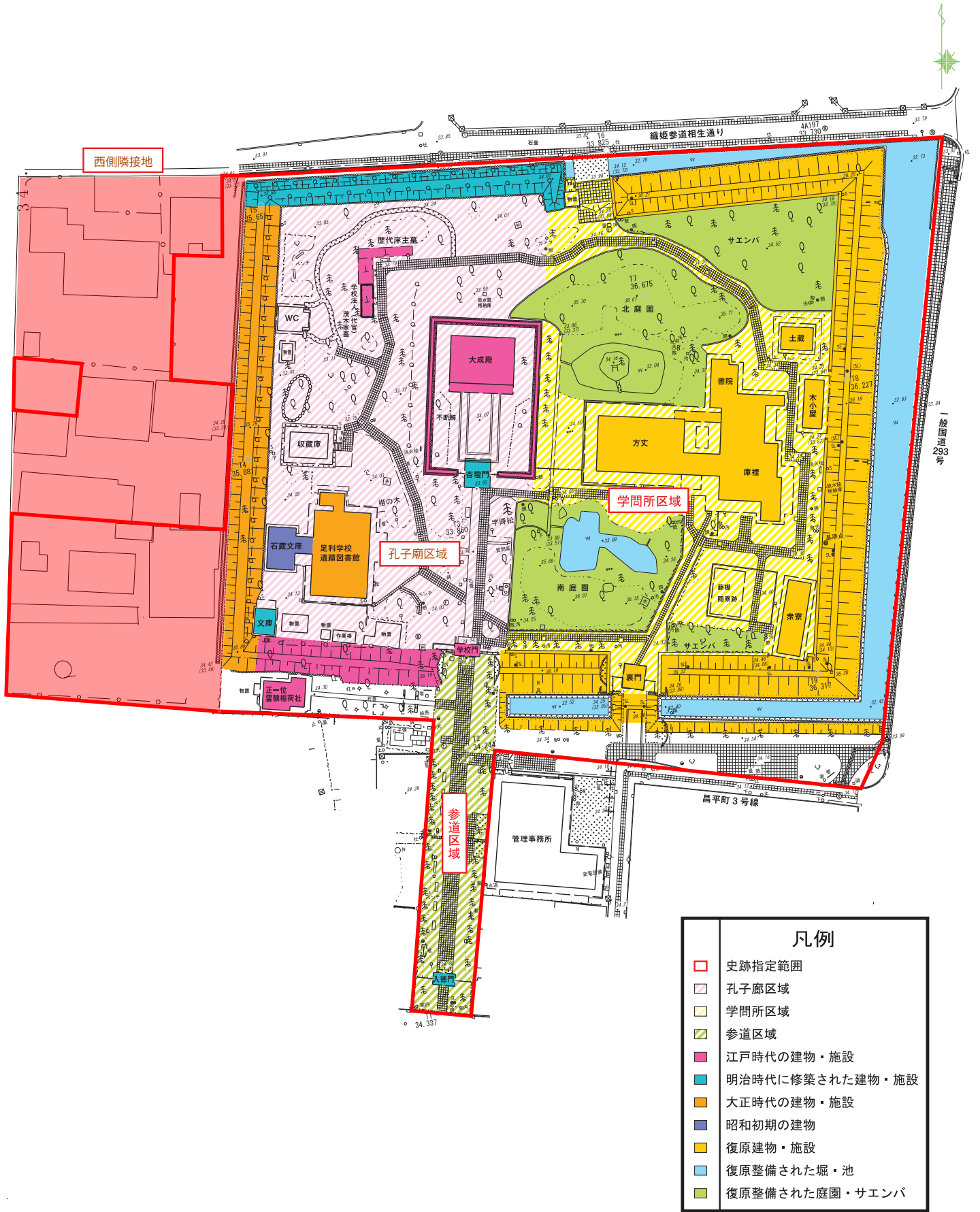
北京国子監平面図(孔2005より)



成均館平面図(張他2010より)



ハノイ廟略図(小林2004より)



3-2 史跡の構成要素

(1) 参道区域

内門前通りから学校門前までの参道及び南西土塁の南側、稲荷社が建つ区域である。参道は江戸時代より継続して使用されてきた。稲荷社は、明治時代末期に南堀を埋め立てた上に移転して建てたものである。

1) 江戸～明治時代の建造物等

ア 入徳門

構造／形式／規模 高麗門、切妻造、
桁行2.29m、梁間1.57m、棟高3.93m、

建築面積3.59㎡、
建築年代 寛文8(1668)年

現在の建物の年代 天保11(1840)年

修理／整備年 天保11(1840)年修築、
明治42(1909)年裏門を移築、昭和38(1963)年、
平成11(1999)年(屋根葺替え部分修理)

指定等 国指定史跡

立地・機能・用途・様式上の特徴等

足利学校最初の門で南面する。「入徳」は紀伊徳川家第11代藩主大納言徳川斎順の書とされる。柱間装置として両開き板扉を設ける。左右に丸雁振瓦をのせた袖塀が付く。



入徳門

イ 正一位霊験稲荷社並びに覆屋、拝殿

構造／形式／規模 本殿：神明造、

桁行5.58m、梁間3.70m、
建築面積20.65㎡、
拝殿：切妻造、桁行5.15m、

梁間3.64m、建築面積18.75㎡、
流し板・目板銅板葺

建築年代 天文23(1554)年再建

現在の建物の年代 不明

修理／整備年 明治42(1909)年移築

指定等 未指定

立地・機能・用途・様式上の特徴等

天文23(1554)年、社殿を造立し、八幡神を合祀。明和7(1770)年、第16世座主千溪が稲荷大明神を改め正一位霊験稲荷社とした。初午には大般若心経の転読も行われ、大きな行事であった。明治42(1909)年、元の場所から南西部の堀を埋め立てた現在地に移転。



正一位霊験稲荷社

ウ 参道及び両側の松並木

入徳門袖塀前両側には松が植えられている。入徳門から学校門に至る参道両側は松並木である。この松並木は江戸時代の絵図に描かれていないが、石列が伴うことから、小土手の上に植えられたものと考えられ、推定樹齢100年を超えるものもあり、参道の荘厳をなしている。

エ 鳥居 2基

参道から稲荷社へ向かう途中にある。1基は明治29年築造の石製鳥居、もう1基が平成15年築造の木製鳥居である。

オ 水屋

鳥居と稲荷社との間にある。天明7(1874)年の水鉢が置かれ、その上に指定後の建立と考えられる覆屋が建てられている。

2) 現代の建造物等

- ア ベンチ 9基
- イ 街灯 3基
- ウ ライトアップ用ライト 3基
- エ 説明板・案内板・標柱 9基
- オ 絵馬掛け 1基

(2) 孔子廟区域

土塁の内側で、学校門袖塀東側と孔子廟築地塀東側とを結ぶラインから西側の区域。江戸時代以来足利学校として使用され、歴史的建造物が遺され、貴重書を守ってきた区域である。

1) 江戸～明治時代の建造物等

ア 学校門

構造／形式／規模 高麗門，切妻造，
桁行3.03m，梁間1.71m，棟高4.88m，
建築面積5.17㎡，^{ほんがわらぶき}本瓦葺

建築年代 寛文8(1668)年

現在の建物の年代 寛文8(1668)年

修理／整備年 昭和46(1971)年，

平成11(1999)年，平成14(2002)年

(門は基礎の部分修理、^{りょうそでべい}両袖塀は解体修理)

指定等 国指定史跡

立地・機能・用途・様式上の特徴等

入徳門と杏壇門の間にあり、南面する。扁額へんがくの文字は、^{こうちがん}弘治元(1555)年に来日した中国明朝の使節みんちょう蔣竜溪しょうりゅうけいの字を儒学者こまのたかやす狛高庸が縮模したもの。現在の扁額は昭和47(1972)年に複製したもので、当初の扁額は庫裡に展示される。柱間装置として両開き板扉を設ける。左右に棧瓦葺の袖塀が付く。



学校門

イ 杏壇門及び築地塀

構造／形式／規模 ^{しきやくもん}四脚門，切妻造，
桁行3.00m，梁間2.50m，棟高5.54m，
建築面積7.51㎡，^{しきやくもん}棧瓦葺

建築年代 寛文8(1668)年，

明治33(1899)年修築

現在の建物の年代 明治33(1899)年

修理／整備年

平成11(1999)年，平成14(2002)年 (杏壇門は屋根葺替え部分修理、袖塀は解体修理、築地塀は屋根葺替え部分修理)

指定等 国指定史跡



杏壇門及び築地塀

立地・機能・用途・様式上の特徴等

大成殿(孔子廟)入口の門で南面する。扁額は紀州徳川家第10代藩主徳川治宝の書で、天保14(1843)年に掲げられた。明治25(1892)年の火災で炭化した扁額は、庫裏に展示している。柱間装置として両開き棧唐戸を設ける。左右に本瓦葺の袖塀が付き、東袖塀中央に脇戸が開く。

袖塀には大成殿を囲む築地塀が接続する。築地塀は棧瓦葺、腰石垣積、東面には板唐戸2枚内開きの潜戸くぐりどが1か所開く。

ウ 大成殿 (孔子廟)

構造/形式/規模 いちじゅうもこしつき よせむねづくり 一重裳階付、寄棟造、

桁行12.73m, 梁間9.09m,

建築面積138.82㎡, 本瓦葺

建築年代 寛文8(1668)年

現在の建物の年代 寛文8(1668)年

修理/整備年 昭和47(1972)年,

昭和49(1974)年, 平成11(1999)年,

平成23(2011)年~平成24(2012)年,

平成30(2018)年~令和2(2020)年(予定)

(屋根葺替え半解体修理、耐震補強)

指定等 国指定史跡

立地・機能・用途・様式上の特徴等 こうし でし まつ びょう 孔子とその弟子を祀る廟。寛文8(1668)年、中国明代の聖廟せいびょうを参考にして寺社奉行 いのかわちのかみまさとし 井上河内守正利が設計、建立した。現存する日本最古の孔子廟で重要な建造物。扁額は浄土宗大本山華頂山知恩院の揮毫きごうで、天保6(1835)年揭示。内部には天文4(1535)年制作の「孔子坐像」(栃木県指定文化財)、「小野篁坐像」(足利市重要文化財)を安置する。11月23日には孔子とその弟子を祀る「釋奠」(足利市重要文化財)を行う。



大成殿 (孔子廟)

工 足利学校遺蹟図書館

構造/形式/規模 いりもやづくり もくぞうひらやだ 入母屋造、木造平屋建て、

桁行16.33m, 梁間11.16m,

建築面積182.24㎡, 棧瓦葺

建築年代 大正4(1915)年

現在の建物の年代 大正4(1915)年

修理/整備年

平成23(2011)年(保存修理工事)

指定等 市指定建造物

立地・機能・用途・様式上の特徴等

書籍の保存と閲覧を目的として大正4(1915)年に建立。基礎及び外壁は煉瓦積みの上石材や漆喰仕上げ。ポーチはコンクリート造りに和風の切妻屋根が調和し、大正建築の特徴を表す。



足利学校遺蹟図書館

オ 文庫

構造/形式/規模 どぞうづくり 切妻造、二階建て土蔵造、

桁行3.64m, 梁間4.55m,

建築面積16.53㎡, 棧瓦葺

建築年代 明治15(1882)年頃

現在の建物の年代 明治15(1882)年頃

修理/整備年 大正4(1915)年及び



文庫

昭和12(1937)年に移築

指定等 未指定

立地・機能・用途・様式上の特徴等

明治15(1882)年頃、孔子廟の南西隅近くに文庫として書籍を収納するため新築。遺蹟図書館建立後、書庫としてその西側に移築、昭和12(1937)年、蔵書増加のため石造書庫が新築されると、南方の現在地に移築される。北面に観音扉が付く。

力 ^{れきだいしょうしゅぼとう} 歴代庠主墓等 ^{がっこうやくにん だいかん も ぎ け はか} 及び学校役人(代官)茂木家の墓

構造／形式／規模 大成殿の裏側にある。歴代庠主墓は、石列で区画された東西11m×南北2.2mの範囲の中に無縫塔などからなる庠主墓が20基並ぶ。その西南には松川東山の墓等があり、さらに南側に江戸時代に学校役人(代官)であった茂木家の墓が東西2.44m×南北6.4mの範囲に石塀に囲まれてある。

建築年代 寛延2(1749)年以前

修理／整備年 平成2(1990)年

指定等 未指定

立地・機能・用途・様式上の特徴等

これらの墓域は、旧土塁の北西隅の裾に沿って設けられている。歴代庠主墓及び茂木家の墓については、もとあった場所は明らかになっていないが、明治時代中頃に現在の場所に移設されたと伝えられる。松川東山の墓等は、記録から当初からこの場所にあったと考えられる。

キ 堀・土塁(西半部)

構造／形式／規模 西部：土塁幅約7.2m, 土塁総延長約97m, 土塁高約2.2m, 堀幅約8.2m, 深さ約2.0m, 比高差約4.2m, 南西部：土塁幅約8.4m, 土塁総延長43m, 土塁高約1.8m, 堀幅約8.5m, 深さ約1.9m, 比高差約4.3m, 北西部：土塁幅約5.0m, 土塁総延長約64m, 土塁高約0.8m, 堀幅約9.1m, 深さ約2.3m, 比高差4.2m

建築年代 宝暦年間(1751～1764)以前

修理／整備年 明治42(1912)年, 大正元(1912)年

修理／整備の区分 移築, 埋め立て

指定等 国指定史跡

立地・機能・用途・様式上の特徴等

学校敷地を囲繞する長方形の境界施設。発掘調査によって、明治末から大正初期にかけての西半分の敷地拡張に伴い、西堀及び北堀北西部を埋め立て、上に西土塁・北土塁を移築、堀南西部を埋め立てた上に正一位靈験稻荷社を移築していることが確認された。学校門西側の南土塁は旧状をよく留める唯一の部分である。出土遺物から堀は江戸時代以前に造られていたと考えられ、数度の浚渫が繰り返されていたことが確認された。



歴代庠主墓



学校役人(代官)茂木家の墓



西土塁の現況



北土塁西半分の現況

ク かなふり松(字降松)

学徒^{がくと}が書籍を読んだり内容を考えたりする際に読めない字や意味のわからない言葉に出会った時、それを書いた札をこの杏壇門前の松に下げておくと、庠主等がふりがなや意味を書いてくれたという伝説がある松。現在の松は樹齡約80年で5代目とされる。



かなふり松



現代版かなふり松「かなふり松質問箱」

2) 史跡指定以降の建造物

ア 石造書庫(新文庫)

構造/形式/規模 石造切妻造,^{せきぞうきりつまづくり}

桁行7.27m, 梁間4.55m,

建築面積33.06㎡, 棧瓦葺

建築年代 昭和12(1937)年

現在の建物の年代 昭和12(1937)年

修理/整備年 無

指定等 未指定

立地・機能・用途・様式上の特徴等

遺蹟図書館の書庫として、文庫の代わりにその場所に新築。

建築面積は文庫のほぼ倍で、昭和43(1968)年の収蔵庫設置まで、足利学校の書籍を収納した。東面に鉄製観音扉が付き、図書館と接続する。



石造書庫 (新文庫)

イ 収蔵庫(新々文庫)

構造/形式/規模 平屋建て高床式,^{たかゆかしき}

鉄筋コンクリート造,桁行4.50m,

梁間7.20m, 床面積32.40㎡

建築年代 昭和42(1967)年

現在の建物の年代 昭和42(1967)年

修理/整備年 無

指定等 未指定

立地・機能・用途・様式上の特徴等

国宝などの蔵書を安全に保管するため建立。妻入り正面に幅1.2mの階段を設け、観音開きの金庫扉を設置する。室内は収蔵室と前室にわけ、収蔵室に国宝などの貴重書・特別書約1,700冊を収蔵する。高床式、鉄筋コンクリート造で、地震や火災から書籍を守る。



収蔵庫 (新々文庫)

3) 現代の建造物等

- ア 消火栓・放水銃 2基
- イ あんどん型ライト 2基
- ウ トイレ 1棟
- エ 説明板・案内板・標柱 21基
- オ 物置・プレハブ 5棟

(3) 学問所区域 (復原区域)

孔子廟区域の東側にあたる。明治時代初頭には近代学校となり、長く足利市立東小学校として使用されてきた。平成2年に完成した第1次保存整備事業で江戸時代中期の姿に復原された区域。

1) 第1次保存整備事業で復原された建造物等

ア 方丈

構造/形式/規模 寄棟造、桁行17.18m、
梁間10.71m、軒出1.52m、軒高4.55m、
棟高13.25m、6間取形式、建築面積(玄関・
北廊下を含む)253.19㎡、茅葺き

建築年代 宝暦6年(1756)年

現代の建物の年代 平成2年(1990)年

修理/整備年 平成2年(1990)年

指定等 未指定

立地・機能・用途・様式上の特徴等

学生の講義や学習、様々な行事に使用された。
中央奥の仏殿の間、その西の尊牌の間(徳川歴代
将軍の位牌が安置)等、6間からなる。柱間装置として外廻りは西・南・東が雨戸と腰障子、北が舞良戸と明障
子、一部漆喰壁からなる。内部は腰障子及び襖を立て込む。庫裏とは瓦葺唐破風造りの玄関と吹き抜けの北廊
下で連結する。



方丈及び玄関

イ 庫裡 (庫裏)

構造/形式/規模 正面・東面入母屋造、背面寄
棟造、桁行18.14m、梁間8.83m、軒出1.36m、
軒高4.80m、棟高12.10m、建築面積207.70㎡、
茅葺き

建築年代 宝暦6年(1756)年

現代の建物の年代 平成2年(1990)年

修理/整備年 平成2年(1990)年

指定等 未指定

立地・機能・用途・様式上の特徴等

カマドのある土間に板敷きの台所、畳敷きの4部

屋からなり、庠主や学生の食事等生活の場であった。土間の南側に小者部屋、台所の東側に東下屋物置があ
る。東側・西側に樽縁が付く。柱間装置として外廻りは南面に大戸口、潜り戸付板戸及び腰障子が付く。土間
東側は板戸で東西面は雨戸と脇障子、内部は腰障子、襖、板戸が付く。天井は竿縁天井である。土間上部のみ
天井を張らず、小屋表しである。



庫裡

ウ 書院 しよいん

構造／形式／規模 切妻造，桁行8.59m，梁間5.33m，軒出0.91m，軒高3.45m，棟高4.92m，建築面積67.67㎡，木賊葺き
建築年代 宝暦6年(1756)年
現代の建物の年代 平成2年(1990)年
修理／整備年 平成2年(1990)年
指定等 未指定
立地・機能・用途・様式上の特徴等



書院

庫裡から奥に続く庠主の書齋で、北端に便所、東側に湯殿等が付属する。8畳2間の上の間、次の間を南北に並べ、西側に内縁ないえん、さらに東西に樽縁を付ける。柱間装置として外廻りは西面に雨戸、東面に雨戸と腰障子、外壁は上部漆喰壁じょうぶしゅくいかべ、下部下見板張り、内部は腰障子、襖及び杉戸、内壁は漆喰壁、天井は竿縁天井。内縁は化粧垂木、化粧小舞裏、裏板張りである。

エ 衆寮 しゅりょう

構造／形式／規模 切妻造，桁行14.54m，梁間4.55m，軒出0.91m，軒高2.81m，棟高4.72m，建築面積66.10㎡，椽葺き
建築年代 寛延2年(1749)年以前
現代の建物の年代 平成2年(1990)年
修理／整備年 平成2年(1990)年，平成20(2008)年
指定等 未指定
立地・機能・用途・様式上の特徴等



衆寮

学徒の寮として使用された。絵図面等の資料から寛延2(1749)年には存在が認められるが、造営年代は不明である。平面は6畳の前に土間を付けた寮室が4室ある。柱間装置として外廻りは板戸、連子窓に障子、外壁は内法上漆喰塗り、内法下下見板張り、内部は腰障子、内壁は中塗壁、天井は竿縁天井である。

オ 木小屋 きこや

構造／形式／規模 寄棟造，桁行9.55m，梁間3.82m，軒出0.61m，軒高2.6m，棟高5.97m，建築面積36.44㎡，茅葺き
建築年代 寛延2年(1749)年以前
現代の建物の年代 平成2年(1990)年
修理／整備年 平成2年(1990)年
指定等 未指定
立地・機能・用途・様式上の特徴等



木小屋

薪や農具などを置いたほか、漬物などの食料品を保管した。絵図等の資料から寛延2(1749)年には存在が認められるが、造営年代は不明。平面は1室、柱間装置として外廻りは板戸及び無双窓、外壁は内法上中塗壁、内法下堅羽目板張り、内壁は中塗壁、天井は化粧屋根裏である。

カ 土蔵^{どぞう}

構造／形式／規模 切妻造，桁行5.73m，梁間3.82m，軒出0.91m，軒高4.16m，棟高6.19m，建築面積21.87㎡，^{とちぶ} ^{ぎややね} 椽葺きの鞘屋根

建築年代 寛延2年(1749)年以前

現代の建物の年代 平成2年(1990)年

修理／整備年 平成2年(1990)年

指定等 未指定

立地・機能・用途・様式上の特徴等

耐火建築物で貴重品などを保管した。絵図等の資料から寛延2(1749)年には存在が認められるが、造営年代は不明。平面は1室、柱間装置として入り口・窓とも両開き土戸、裏白戸、^{つちど} ^{うらしろど} ^{かなあみば} ^{こうし} 金網張り格子戸、内外壁とも漆喰壁、天井は化粧屋根裏である。



土蔵

キ 裏門^{うらもん}

構造／形式／規模 ^{やくいもんようしき} 薬医門様式，^{おやぼしらしんしん} 切妻造，^{ひかえぼしら} 親柱真々2.42m，^{つちど} ^{うらしろど} ^{かなあみば} ^{こうし} 親柱控柱真々1.67m，軒出0.61m，軒高2.53m，棟高5.09m，建築面積4.04㎡，ぐし棟，茅葺き

建築年代 寛延2年(1749)年以前

修理／整備年 平成2年(1990)年

指定等 未指定

立地・機能・用途・様式上の特徴等

通用門として使用された。絵図等の資料から寛延2(1749)年には存在が認められるが、造営年代は不明。柱間装置として両開きの大扉を設ける。両脇にそれぞれ10尺の袖塀を付設する。柱間装置として上部は漆喰壁、下部は片羽目板張り、東側に潜り戸がある。



裏門（南より）

ク 南庭園^{みなみていえん}

構造／形式／規模 池東西：30m，池南北：15m，池深度：0.45～0.5m，^{つきやま} 書院庭園の形式を持つ築山^{せんすいていえん} 泉水庭園

建築年代 宝暦年間(1751～1764)以前

修理／整備年 平成2年(1990)年

指定等 未指定

立地・機能・用途・様式上の特徴等

方丈南側に広がる築山泉水庭園。発掘調査の結果、宝暦年間(1751～1764)頃の池の改修が認められたことから、^{まくてい} 作庭時期はさらに遡ると推定される。水深は0.45～0.5mが標準で、護岸は池床より水際までが玉石積み、その上が高麗芝による植生である。池尻は池の端部分から中央開渠へ水を流す排水溝まで、その間を玉石で護岸した幅0.3mの排水溝が通る。築山は方丈から見て正面中央の池の南側に最も高い山を配し、その左右に池を囲む形で山を配す。南築山東麓に井戸がある。



南庭園（方丈より）

ケ 北庭園 きたていえん

構造／形式／規模 池東西：19m，池南北：20m，池深度：0.45～0.5m，築山泉水庭園

建築年代 宝暦年間(1751～1764)以前

修理／整備年 平成2年(1990)年

指定等 未指定

立地・機能・用途・様式上の特徴等

方丈北側、書院の西側に位置し、北方の両崖山りょうががいさんに連なる山々が借景しやっけいとなる築山泉水庭園。中島を配し弁財天を勧請した石祠せきしを祀る。発掘調査で室町時代の井戸跡が築山の東西両端で確認されている。また築山に入り江を有する池が江戸時代前半には存在しており、その後3回の改修が行われて、明治維新前後に埋められた。整備された庭園は宝暦期である。



北庭園（書院より）

コ 堀・土塁（東半部）

構造／形式／規模 土塁幅約6.0m，土塁総延長約226m，土塁高約2.03m，堀 幅約7.2m，深さ約0.8m，比高差約2.8m

建築年代 宝暦年間(1751～1764)以前

修理／整備年 平成2年(1990)年

指定等 未指定

立地・機能・用途・様式上の特徴等

学校敷地を囲繞する長方形の境界施設。平成2(1990)年度に、発掘調査及び古絵図調査の成果に基づき復原整備を実施した。足利学校は足利氏宅跡の南東部に位置し、東堀は足利氏宅跡外堀の一部であった可能性がある。堀と土塁を囲繞することにより周りの町屋の喧騒が届かず閑静な環境が維持できるほか、堀外からの火災から建物や貴重な書籍を守ることができる。北堀幅がほかの堀幅より狭いのは、三才図所載諸侯准泮宮図を意識している可能性がある。



南土塁東半部及び東土塁



北土塁東半部

サ 隠察跡及び藤棚 おんりょうあと ふじたな

構造／形式／規模 切石列にて表示された東西13.2m、南北10.44mの隠察跡の上に藤棚を設置している。藤棚は東西2間×南北3間

建築年代 寛延2(1749)年以前

修理／整備年 平成2(1990)年

指定等 未指定

立地・機能・用途・様式上の特徴等

隠察は、庠主等の指導者たちが寝泊まりした建物である。絵図面等の資料から寛延2(1749)年には存在が認められるが、造営年代は不明である。内部構造が不明であるため範囲だけを示す平面表示をしている。藤は旧東小学校にあったものを移植した。



隠察跡の切石表示と藤棚

シ サエンバ

土塁内側の南北の敷地は絵図に描かれていたサエンバが復原されている。サエンバは、菜園場または茶園場のことを示すものと考えられることから、サエンバでは周囲の茶ノ木で垣をつくり、内部では野菜や花木の栽培をする場所として整備している。

2) 現代の建造物等

- ア 消火栓・放水銃・火災報知器 3基
- イ あんどん型ライト 8基
- ウ ライトアップ用ライト 10棟
- エ 説明板・案内板・標柱 15基

(4) 南堀外側の区域

明治時代以降、近代学校の敷地となったが、第1次保存整備事業に伴う発掘調査で確認された南堀の外側、もともと足利学校の堀の外であったことが確認された区域。平成2年に完成した第1次保存整備事業の際、史跡周囲の緑地帯や遊歩道の区域として整備している。



南堀外側の区域

1) 現代の建造物等

- ア 街灯 3基
- イ 説明板・標柱 2基
- ウ 松などの植栽

(5) 西側隣接地（指定地）

西側土塁に隣接し、鏝阿寺大門通までの区域。一部史跡指定地として公有化が行われている。

1) 江戸～明治時代の建造物

- ア 茂右エ門蔵 1棟

2) 現代の建造物等

- ア 藤棚等の植栽
- イ 説明板 1基



西側隣接地の現状